

# 支援を組み立てるための基本 I

行動の機能に着目した支援の組み立て

社会福祉法人 嬉泉  
板橋区立赤塚福祉園  
主任支援員 北川 裕

# この時間で学びたいこと

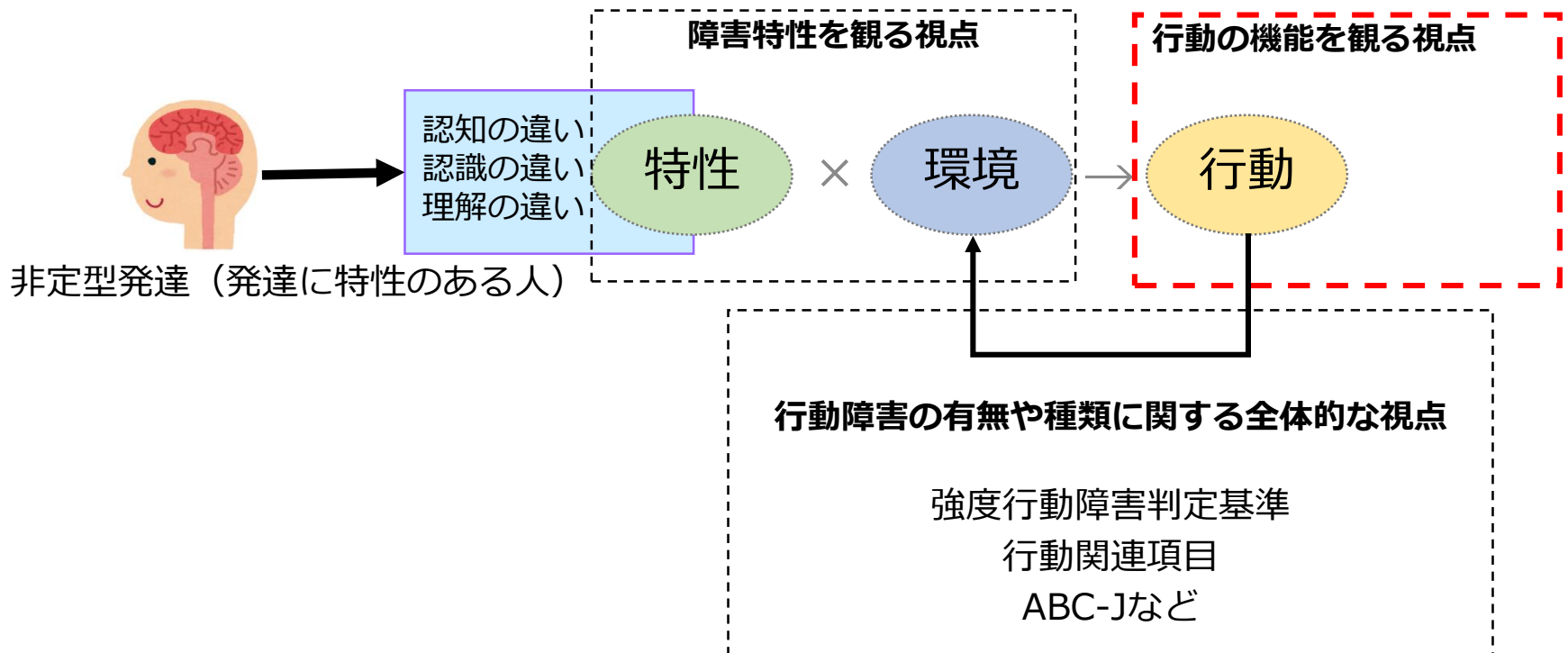
- この時間では、基礎研修で学んだ予防的な支援（特性把握→冰山モデル→構造化）だけでは、行動の改善が難しいケースについての支援の組み立て方を紹介します。
- これまでは、強度行動障害が現れる要因を障害特性と環境の相互作用に注目して支援を組み立てることを学んできました。この講義では、もう一步踏み込んで行動そのもののの中にある、行動の機能に注目する考え方を紹介します。
- 内容的には難易度が高い内容です。闇雲に実践して結果が出るという内容ではありません。この講義の内容は、時間をかけた事例検討等で活用して効果が出るという事を予めご了承ください。

# 基本は「予防的支援」

- 強度行動障害に苦しんでいる方の苦手としている事に配慮をし、得意なことは生活の中で活用する事が支援の基本なので、強みと弱みを把握するという意味でも障害特性の把握は必要です。
- 特性を把握し、苦手なことに対する合理的配慮が構造化という事になります。
- これらの基本的な支援は、予防的な支援と考えることができます。
- しかし、予防的な支援だけで、すべての強度行動障害が改善されるわけではありません。

# 行動の機能を見る視点

行動そのものにどのような機能（メッセージ）が隠されているのかを探る方法が有効な場合もあります。



# i) 機能から行動の意味を推察する

## なぜ、その行動を起こすのか？①

課題となっている行動の裏には、コミュニケーションとしてのメッセージが隠れている

強度行動障害のある方への支援を行う中では、時には課題となる行動に対して戸惑いを感じる 경우가多くあります。私たち支援員からすれば、怪我のリスクもある、「困った人」というイメージを抱きやすい状態です。

しかし、強度行動障害のある方の課題となっている行動には、裏にコミュニケーションとしてのメッセージが隠されていることが多くあります。強度行動障害のある方は、その障害特性とこれまで歩んできた環境と合わさって、本人独特の表現方法（課題となっている行動）に頼らざるを得ない状況にいます。そういった視点で見れば、実は「困っている人」だということが見えてきます。

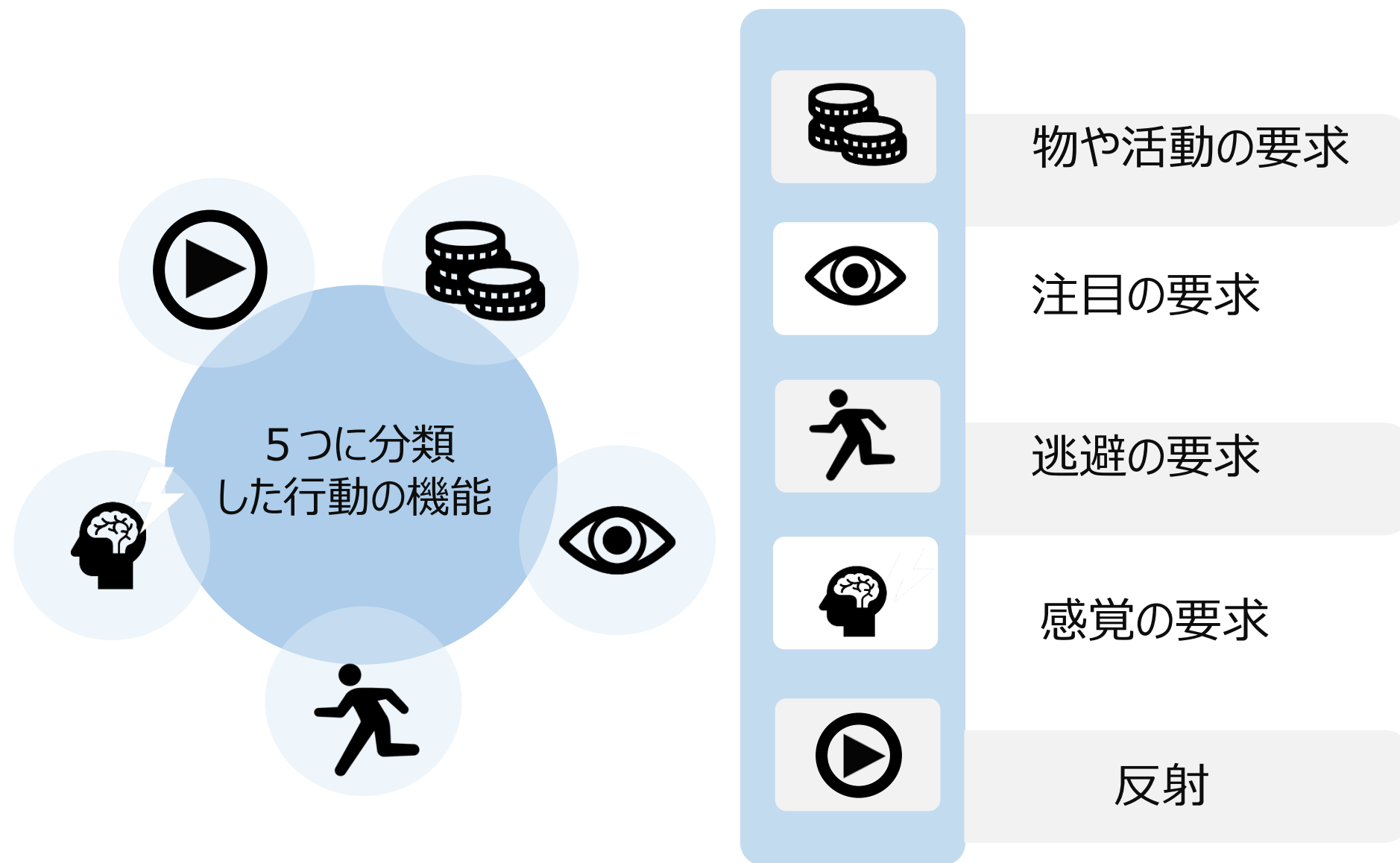
# なぜ、その行動を起こすのか？ ②

**課題となる行動には4つの機能があり、4つのどれかによって強化されている**

応用行動分析学では、行動には4つの機能があるとしています。  
強度行動障害のある方は、それぞれの表現方法により、4つの機能を人に伝えようとしています。

- (1)物や活動の要求（欲しい物を手に入れる）
- (2)注目の要求（自分に人の視線を集める）
- (3)逃避の要求（NOという意思表示）
- (4)感覚刺激の要求（その行動自体が、本人にとって、心地よい刺激となっている）

# 5つに分類した行動の機能





# 物や活動の要求

## 物や活動の要求の機能

(Case 1) 三子さんはお菓子が大好きです。ある日、父がスーパーマーケットに買い物に連れて行き、「昨日お菓子を買ったから、今日は買わないよ。」と言ったとたん、店中に聞こえるくらい大声で泣き、床に寝そべて手足をバタバタさせ暴れ出しました。他のお客さんの迷惑になると思い、「1つだけね。」というと、すぐに泣き止みお菓子を手に取りました。

### A きっかけ



父と買い物中、  
お菓子は買わないといわれる

### B 行動



子どもが大声でわめきちらす

### C 行動の結果



お菓子を買ってもらえる



# 👁 注目の要求

## 注意獲得の機能

（Case 2）次郎くんは、お母さんが食事の準備を始めると、大きな音がするほど自分の頭を叩く自傷行動をしてしまいます。お母さんは、大きな音と奇声に驚き駆け寄って、次郎くんに声を掛けます。次郎くんは声を掛けられ関わってもらえると、自傷行動をやめることができますが、お母さんがいなくなるとまた始めてしまいます。

### A きっかけ



母が食事の準備をしている  
（母の注目なし）

### B 行動



子どもが頭を強く叩く

### C 行動の結果



母が駆け寄ってきて  
話しかける  
（母の注目あり）

# 人 逃避の要求

## 回避・逃避の機能

（Case 3）四郎くんは注射が大嫌いです。医師が注射を取り出すと、奇声をあげ、暴れ始めます。職員数名で手足を抑えても、暴れ続け、注射が出来る状況ではない為、延期となりました。

### A きっかけ



医師が注射を取り出す  
（嫌な活動あり）

### B 行動



子どもが大声で  
わめき暴れる

### C 行動の結果



注射が中止になる  
（嫌な活動なし）



# 感覚刺激の要求

## 自己刺激の機能

(Case 4) 太郎くんは、することがないときや長時間一人でいるときに自分の髪の毛を抜く自傷行為をし続けてしまいます。しかし、本人の好きなテレビを見ている時やおやつを食べている時は、一人でいても自傷行為をしようことはありません。

### A きっかけ



することがない状況  
(感覚刺激なし)



### B 行動



髪の毛を抜く



### C 行動の結果



感覚を得られる  
(感覚刺激あり)

# 🎯 反 射

## 反射の機能

（Case 5） やすおくんは、ある日町の郵便ポストの前で偶然バナナの皮を踏み転んでしまって以来、ポストの前では必ず転ぶようになってしまいました。しかし、他の場所では、そのような行動（わざと転ぶように見える）は見られません。

### A きっかけ



偶然のできごと

### B 行動



特定のきっかけで  
同じ行動を再生

### C 行動の結果

周囲の人の反応に  
よって他の機能に  
変化することがあります

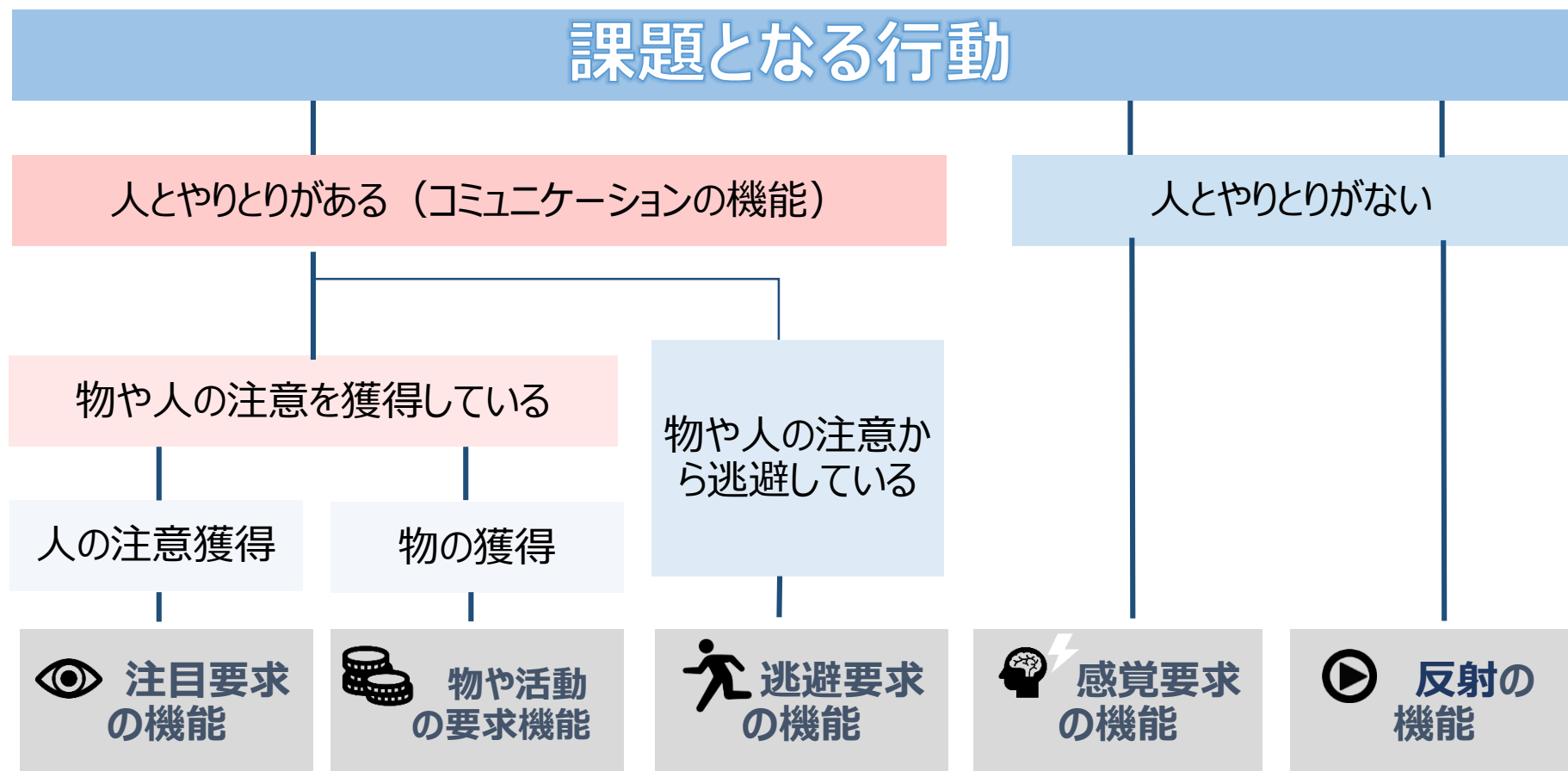
# なぜ、その行動を起こすのか？ ③

**行動の機能を見ることで、声なき声に気づき、支援に繋げることができる**

行動の機能を見る視点を入れることで、課題となる行動を持つ人たちの「声なき声」に気づき、彼らが何を伝えたいのかを、冷静に見ることができます。困りごとを理解し、支援に繋げることができるのです。

# 行動の機能を推定して支援計画に結びつける

## 行動問題の機能を推定するフローチャート



強度行動障害への支援の基本は、冰山モデルなどを活用し、本人の障害特性に配慮した予防的な支援を組み立てることです。

基本の予防的支援ではなかなか支援が効果を上がらない場合、冰山モデルでは不適切な環境因子が特定できにくい場合や関係している特性の特定ができにくい場合では、機能分析を使って支援を組み立てる方法があります。

ここからは、行動が起きている「状況」と「結果」に注目する

## 「ストラテジーシート」

をご紹介します。

## ii) 行動の機能から支援を組み立てる

強度行動障害に対応する支援を組み立てる手順の例

1. ターゲットとする行動の決定
2. 行動に名前をつける
3. 行動を記録する
4. 行動の機能を推定する
5. ストラテジーシートの作成



## 手順 1. ターゲットとする 行動の決定

課題となっていてアプローチしたい行動を  
決めます。

複数の行動ではなく、ひとつの行動に絞っ  
てアプローチすることが大切です。

## 手順 2. 行動に名前をつける

行動を具体化し名前を付けることで、

- ・ 課題となる行動が明確になります。
- ・ 課題を共有・共通理解しやすくなります。
- ・ 一貫した対応がしやすくなります。
- ・ 記録がしやすくなります。
- ・ 対応の効果（増減）がわかりやすくなります。

## 手順3．行動を記録する

強度行動障害への支援を組み立てるうえでは、  
「行動の具体的な記録を取る」ことが有効です。

行動の具体的な記録を取ることで、

- ・ 起こる場面が予測可能になる
- ・ 行動の機能が推定できる
- ・ 起きていない場面に潜む良い条件に気づく
- ・ 対応の準備がしやすくなる
- ・ 指導やアプローチの成果がわかる

ここでは「行動記録用紙」を使用します。

# 「行動記録用紙」

## 行動記録用紙

氏名：

ターゲットとした行動 (B) :

[illegible]

# 「行動記録用紙」

## 行動記録用紙

氏名：

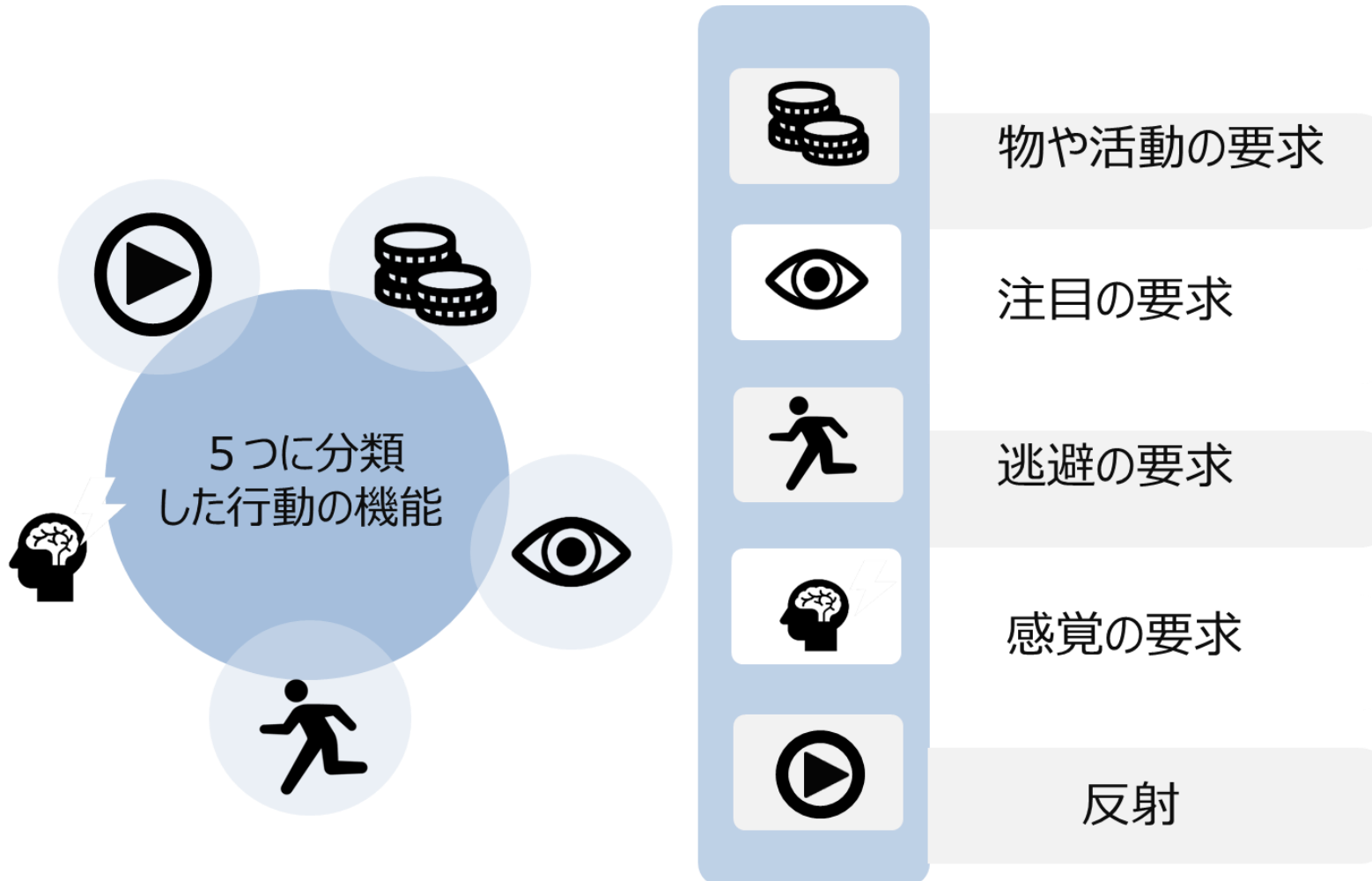
ターゲットとした行動（B）：

日付	先行事象（A）	誰に・何に	何をした（B）	結果事象（C）	対応後の本人の様子・その他の気づき	記録者
	②		①	③		

行動記録用紙は記載が多いほど良いですが、ある程度標準的な流れが見えてきたら記録した行動の分析を行います。

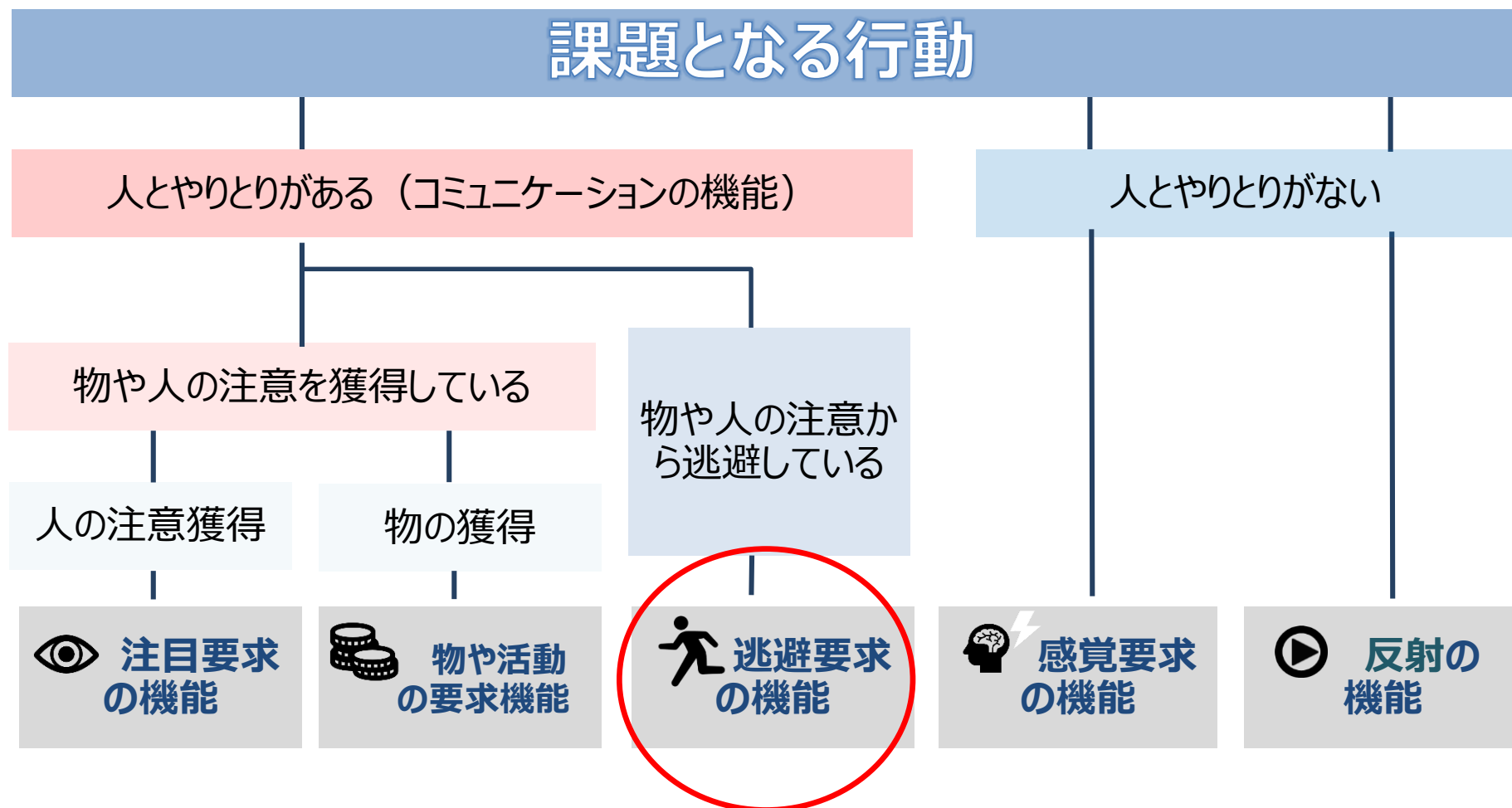
## 手順 4. 行動の機能を推定する

### 5 つに分類した行動の機能



# ターゲットとした行動の機能を推察する

## 行動問題の機能を推定するフローチャート



## 手順5. ストラテジーシートの作成

### 「ストラテジーシート」とは

ストラテジー（Strategy）とは「戦略・目的達成のための方策・方法」の意味です。

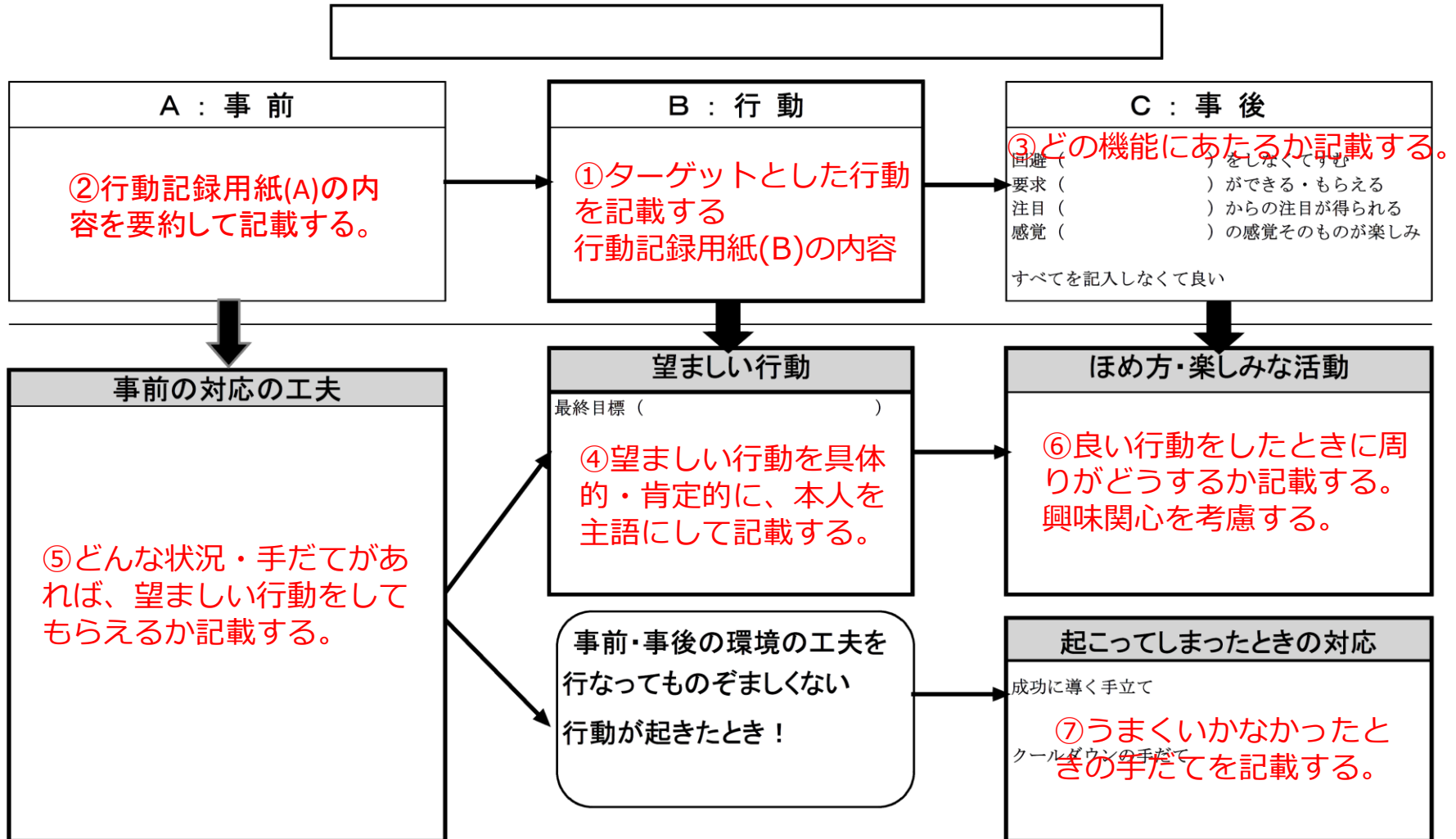
ストラテジーシートは行動をもとに行動障害の背景を考え、対応策を考えるのに適しています。

ストラテジーシートは、行動への対応をチームで考え共通理解するときに活用できるフレームワークです。



# ストラテジーシートの作成方法

ストラテジーシート ver. 3.0 【記入日 年 月 日】 【氏名 】



# スキャッタープロットによる記録

<観察する行動>

①髪の毛を引っ張る

②突然触る

③いやがることを言う



起こりやすい時間がわかる

起こりやすいパターンがわかる

アドバンス研修の取り組みから

# 強度行動障害支援の実践を阻むもの

研修履修者の知識、技術の向上＝成果ではない  
学んだ事を活かす環境が大切だが阻むものが多い  
アドバンス研修では、活かす環境を重視

- |          |   |                      |
|----------|---|----------------------|
| 共通理解の不足  | → | ミーティング時間の確保          |
| 専門性の不統一  | → | 動画によるミニ研修の実施         |
| 認識のずれ    | → | 具体的な目標設定             |
| 解釈のずれ    | → | 客観的な行動記録             |
| 記録の統一共有  | → | ソフト・アプリによる記録         |
| スーパービジョン | → | 研修リーダーからのネットによるアドバイス |

# 事業所内の共通理解と リーダーシップが職場環境を変える

- ガバナンスの具体化
- 管理職の理解と応援
- 仲間づくり
- 情報共有システム

– 支援を共有できないと「実行」が困難になる

- プログラムの作成と実行をマネジメントできるリーダーの養成が重要！
- 記録、支援計画立案、実施、評価のルーティンを回せる人

# アドバンス研修の特徴

1. 連続5回の事例検討会
2. 参加者は年間30名程度
3. 1グループ3名にグループリーダー、インストラクター配置
4. ICTを活用したスーパーバイズ、コンサルテーション
5. 研修のミニ動画を公開し、事業所内での伝達研修に活用
6. グループリーダー、インストラクターは本研修の卒業生
7. 事業所の施設長の研修参加が必須条件

# アプローチのポイント

## ① アセスメントの理解

- プロフィール(障害特性、コミュニケーションスキル、余暇スキル、行動の履歴)
- 行動上の問題に対するスクリーニングと全体把握のツール  
ABC-J,BPI-S
- 機能的アセスメント（Functional Assessment）の理解

## ② 機能分析に基づくアプローチの理解

- 環境調整
- 問題とされる行動に対する代替行動の獲得支援

## ③ チームアプローチの理解と実践 + ICT活用

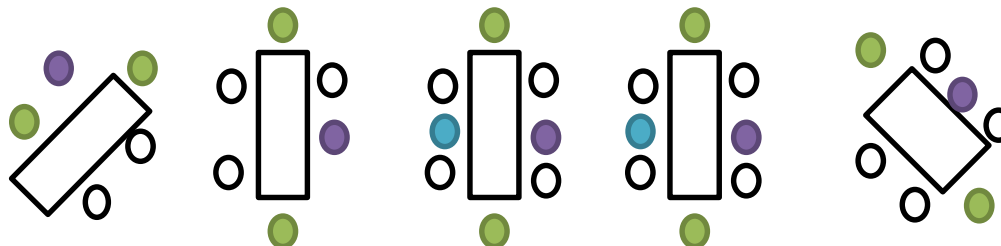
- 各事業所でのマネジメント、事例ミーティング、行動記録、それに基づいた実践と成果の共有を行えるようにする

# スタッフと進め方

- グループ演習を中心とした連続研修
- 事前評価（参加者と利用者）→連続研修→事後評価
- 毎回の研修での機能分析の理解と演習
- 事業所でのM T Gと実践の流れ
  - 他のスタッフへのミニ講義（ネット動画）と情報共有
  - I C Tを利用した記録と提出
  - グループリーダーのコメントと実践
  - 次回研修へ

インストラクター  
グループリーダー

講師



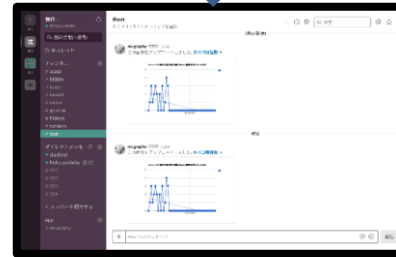


## 研修全体の情報提供



研修用 HP

## グループリーダーからの アドバイス ミニ講義の提供



SNS

ネット環境があれば  
パソコン・スマホ・タブレットで  
使える

Google Form

s01tokyo 行動観察シート

入力者のニックネームを記入してください \*

氏名を入力

行動を具体的に記入してください \*

例: 起床後、洗面所へ移動し、歯を磨く

日時を入力

行動が生じた日にちを選んでください \*

yyyy/mm/dd

行動が生じた時間を選んでください \*

事業所での  
行動記録

ネット環境なしで記録できる  
アプリ  
Observations



# 強度行動障害アドバンス研修とは

- ① 行動障害に対する支援者のリーダーを養成することを目的としている
- ② 機能分析に基づくアプローチの理解  
連続研修により「機能分析」を理解し、それに基づいた支援プログラムを作成を学ぶ
- ③ チームアプローチの理解と実践 + ICT活用  
各事業所でのマネジメント、事例ミーティング、行動記録、それに基づいた実践と成果の共有を行えるようにする

# ①リーダーの育成

- 東京の人口は1330万人おり、それだけ強度行動障害に困っている人数も多い。
- アドバンス研修では地域の中で困ったときに相談できるスーパーバイザーの養成を目的としている
- スーパーバイザーに必要なのは、専門的な知識や技術だけではなく、その知識や技術をどのように使うのかをコーディネートできる力
- 施設運営上の課題対応や事業所内での会議の進め方等、一見、強度行動障害支援とは関係ないような知識の成熟も求められている

## ②機能分析

- アドバンス研修は、機能分析を基本としている。  
。これは機能分析を採用するという意味ではなく、あくまで障害特性をエビデンスとした構造化等の予防的な支援を基本
- 予防的な支援ではうまくいかない場合、より細かい記録、手順書、分析が必要となる場合、行動の機能に注目する方法として機能分析を学ぶ
- ストラテジーシートを使用したフレームワークを学ぶ
- 機能分析の知識を持ったグループリーダー、インストラクターがサポート

### ③チームアプローチ、ICT活用

- 研修時に各施設の事情等を考慮したマネジメント上のアドバイス
- 会議の進め方や「困った職員」への対応方法等、理想論ではなく、より現実的な課題に対する対応策をアドバイス
- 「記録のつけ方」ではなく「記録のつけさせ方」のアドバイス
- ICTを使用し、グループリーダーがオンタイムで記録にアクセスすることが可能で、タイムラグのないアドバイスが可能
- 研修時にアンケートを取るが、インターネットを活用することで即時に研修内で結果の共有が可能